

眞 生

第十卷 第四號

□今年ももう四月となつた、一年の四分の一は已に過ぎたことになる。何と云ふ年月の立つのは速いものであらう。人生は夢のやうだと云ふが本當に人の一生は夢のやうに速く過ぎ行くものかも知れぬ。

□それも、若い間は年月の立つのは未だ速いとは思はなかつたが、三十を過ぎてからの一年は實に其の速さは矢のやうである。

□此の分で、尙人生が過ぎて行くならば私共の一生はまた、く暇に過ぎて行き、恐くは何一つとして成す暇はないかも知れぬ。

□それにしても、已に過ぎて終つた年月は仕方がない、せめて之からの人生だけなりとも本當に無駄にしないと云ふのが私共の覺悟ではなからうか。

□人生は不定である。此の上いつきんなことがあつて、自分達の命が無くならないものでもない。今年は今とは云つて何事も爲さず過ぎてしまふのが此の世の常である。

□此の意味に於て、私共は今後の生活をいかにするかと云ふことを此の上ともに充分に考へて、眞生の道へ突進するのが本當ではないか。

□それには人生の意義を深く反省して、永遠の生命に生き無限の向上に此の身心を献ぐるの覺悟がなくてはなるまい。

□如來の大悲に生きるとは即ち如來の慈光に生きることであるが、如來の慈光に生きるとは即ち如來の道に此の身を働かすことである。

(念)

何處に？

目次

やらして貰つた 魁

救済の宗教 土屋觀道

宗教改革者とし

ての法然上人 土屋觀道

行基三昧會に際して

土屋觀道

吾朋使り

やらして貰つた

一寸人の下駄一つ揃へてやつても、揃へてやつたくと思つてゐます。一寸電車賃十銭出してやつた事でも、十銭出してやつたくと思つてゐます。何といふケチなことですか。

出してやつた、揃へてやつたと思つてゐる内は、やつたことは何の功德にもなつて居りません。寧ろ「罪」になつて居ります。その貪慾の心、その貧乏な心、その心が自分の徳に瑕をつけて居ります。そればかりでなく、相手の者にも、そのさもしい心、怨みや悪しみ心を被せて、相手の者まで傷をつけて居ります。何といふ醜い、怖ろしいことですか。

そうでなくて、下駄一足も、本當に揃へさして頂けた、自分の下駄を揃へるのさへ當り前であるのに、人の下駄まで揃へさして貰へたといふことは有難いぢやないですか。

下駄を揃へると云ふ場合だけでなく、假令、人の尻を拭かされて貰つても、人の借金を拂はされて貰つても、拂ふ力が自分にあり、拂ふ役割が本當に自分に悪まれて來てゐたのなら、私は「有難いことだ」と思ひます。

此の「やらして貰つた」「有難い事だ」といふ感謝の中に、初めて、本當の佛の御徳が現成します。「俺がしてやつた」「俺がした」といふ此の「俺が」がされたとき、本當の尊さがあります、そして自分といふ者が無くなり、「活きた佛」が浮き出されます、その働きこそ無礙無罣です。(魁)

佛様といふて、何だか目の前にハッキリ見えるようなものは何もないが、かといふて、目の前に、光明だとか、お姿だとかいふて、見える以上に、心の上に、

「有難いナア」

「こんな淺ましいことで恥かしいなあ、さうかして、もつとよくならして貰ひたいもんだ」

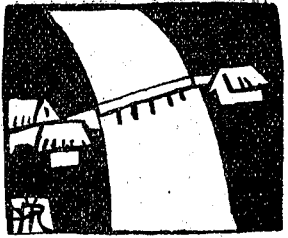
なご、思へる念ひの方が、餘程ハッキリしたものであります。

此のハッキリさがあれば、如來様が見えなくとも、お聲が聞こへなくとも、ちつとも張り合へなくも寂しくありません。寧ろ此の心の上に、ハッキリ見えて來た、如來心、自己の眞實相こそ、却つて如來さまの本當なお姿であります。

それを、此の手に「如來さま」を見出さずと、たゞ鼻の先きばかりに佛様を見出そうと思つて、追驅け廻してゐるから、いつまでたつても、如來さまに巡り逢はぬのです。

今、三河の上郷の龍松さんといふ方の處へ來て、お念佛を申さして頂いて居りますが、此家の隣の辰さんといふ人は、お月さんの在りかを見届けたいと思つて、名古屋の熱田まで、七里の道を歩いて行かれたそうです、けれど結局夜が明けて來て、お月様が消えて、ボーンと失くなつて行つて了つたそうです。本當に笑ひ話のような話だが、全く月ばかりを目當てに、空を仰いでテン／＼と歩いてゐるような歩き方を、お互に澤山してゐることだと思ひます。

月の在り家は、そんな天井にばかりあつたではありません。足元にあつたのです。手に光つてゐるのです。心底に、心底に動いてゐるのです。此の眞底から、本當の光りと力みを揃ひ出し、それによつて活かされるようになった時、初めて、本當の働きです、信仰でせう。(魁子)



救済の宗教

土屋 觀道

一、人格と云ふこと

○「宗教の救いと云ふものは人の善悪や智愚老若を問はないと云ふが如來の大悲から見ればそれも無理ないことでありませう。又自ら努力しても良くなることのできない人から云へばさうした佛の救済も大切なこと、思います。乍然已に信仰に入つた後もやはりそれでよいものでせうか。」

□「それでゐてとはどんな意味ですか。」

○「つまり、自分は罪惡生死の凡夫であるから、決してよいことのできる身でないとして、何等の修養も努力もせないでゐてよいかと云ふことです。」

□「それは非常な誤りです。もともと私共が他力教に入ると云ふことが最善の努力修養の結果であつて、信仰に入つたからとて、其の修養努力の必要がないと云ふのではありません。たゞ從來の立場から云へばいかなる事柄でも爲すべきは爲し、爲すべからざるは爲さぬと云ふのが其の立場でありましたが、浄土教の立場は其の爲し能はざるところをもがかずして合掌し、如來の靈化によつてそこを切り抜けやうとするところにあります。」

○「すると、浄土教と雖も人格的生活を無視するものではないですね。」

□「それは云ふまでもないことです。否それどころか普通ならば自分の力でよくならうとしてもよくない場合は自暴自棄に陥るか、それとも絶望に陥つて苦惱する外に道がないところを、そこを救はうとするのが浄土教であります。そしてまたさうした場合にそれによつて、そこを本當に救はれるのが浄土教の信者であります。」

○「然し、浄土教に限つてどうしてそれが救はれるのでせう。天地の眞理には二つはないと思ふのにそれはまたおかしいことではないでせうか。」

□「いや、天地の眞理から云へば皆一つです。だから、何れの宗教も宗教の眞理から云へば結局は其の一に歸すべきものと思ひます。乍然多くの既成宗教は其の時代々々によつて現はれたものでありますから、其の時代や民族の發達程度によつて、其の教への現はれも一つではないのです。而も此の意味に於て眞にいかなる罪深きものでも、愚かなるものでも如來の大悲によつて救はうとして現はれて來たのが浄土教であります。」

二、如來の救済

○「然ば如來の救済と云ふのはどんな原理が含まれてゐるのでせうか。救いの原理が伺いたいものです。」

□「そのことは古來色々の學説もありますが、浄土教と云ふ立場から云へば一つの信仰であり、宗教でありますから、全く理窟はありません。たゞ阿彌陀佛の本願を信じて浄土に往生し、修行して佛となること云ふのが其の信仰であります。」

○「それにしても、そこには何か佛の救いと云ふ原理があるものではないでせうか。」

- 「それはあるに違いありません。いかに佛と雖も天地の眞理を無視して之を選ずると云ふことはできないと思ふからであります。」
- 「然ば其の救いの眞理と云ふものを聞かして貰いたいものであります。」
- 「それは非常に困難なことかと思ひます。何となれば凡そ天地の眞理は自ら之を体験するより外には其の道がないと思ふからであります。それは恰も甘いと辛いと云ふことがそれを自分に味ふ外には之を耳で聞いても手で觸つても判るものでないのと同じであります。」
- 「すると救いと云ふことは自分で体験するより外に道はないものでせうか。」
- 「先づ私にはそれより外に道はないと思ひます。」
- 「乍然救いの道理と云ふことは食物の味とは異ふのですから、何とか今少しく私共の心の上に考へることのできるやうに眺むることはできないものでせうか。」
- 「然し、それも結局は一つの議論に過ぎません。やはり宗教の救いも其の結局はそれらの理窟のない救いの事實であります。」
- 「それでは改めて御尋ねしたいのですが、阿彌陀佛は何を以つて、罪惡生死の凡夫を御救いになるのでせうか。普通のものならば罪惡生死の凡夫といへば仕やうのないやうな徒らもので、神も佛も之を見捨てると云ふのが本當ではないでせうか。」
- 「若し、天地の眞理から見れば罪惡は之を許さず、其の人は之を救ふと云ふのが本當でせう。だからいかなる場合でも罪惡そのものはいかに小なるものでも之を許さぬが、然しそれを犯した人その人は何とがしてよい人になつてやりたいと云ふのが本當のところだせう。」
- 「然し實際のところ其の罪を悪くんで其の人を悪くまぬと云ふやうなことができるでせうか。」
- 「それはできると思ひます。自分の手を痛めたときその手の病氣はいやですがその手までいやだと云つて捨てる氣にならぬではありませんか。殊にそれか自分の最愛の妻や子供の病氣等に於て然りと思ふのであります。」

- 「でも罪惡と病氣とは異ふではありませんか。」
- 「然し大きな眼から見たら結局同じではないでせうか。自分の躰が弱い爲めに色々の病氣をして非常に惱むのも自分の行いが自分の修養の足らない爲めに道ならぬことにのみ走るのも之を完全なる人から見たら、一種の病氣と云つて差支へはありますまい。その意味から云つて、阿彌陀佛は病人に對するお醫者であり、念佛は病氣に對するお薬と云つてもよいのです。だからお醫者の方から云へば病氣と人とは混同してはなりません。若しも病氣を悪むやうにその人までも悪くんだら、病人は悉くその醫者から殺されてしまふでせう。それと同じく、如來様の大悲には其の人の罪は悪むが其の人は悪むものではありません。否それどころか、如來の大悲を親の大悲に譬へてありますが、親の心は子供が可愛いので少しの病氣もさせたくないやうに、如來の心は私共に少しの罪も造らせたくないのがその心であります。そしてまた、それと同時に、親の心が子供の病氣を一刻も早く癒し、完全人になりたいやうに佛の心は私共の心を佛のやうに完全にしてやりたいと云ふのが本心であります。従つてそこに佛の心と親の心とは非常に似通つてゐるところがあります。此の意味に於て佛の大悲が私共の罪を悪んで其の人を悪むものでないことと云ふことが判りませう。そしてまた、そこにいかなる罪深いものも愚かなるものも佛の前には許されると云ふ意味があるのであつて、此の意味の眞理は普通世間の道德と雖も決して許さないことではないでせう。」
- 「然し、道德の眞理は親子の關係をのみ以つて之を相殺すべきものではないでせう。例へば人の物を盗んだ子供の罪をその親が許したからとて、其の子がよくなつたと云ふものではないでせう。それと同じく、私共の罪過をたとい佛が之を許し給ふとしても私共自身にはそれが爲めによくなつた

とは云へないではありませんか。」

□「それは無論のことです。乍然淨土教の立場は更に其の上に一步を進めて、其の佛の親心が私共を救ふべくいかに働いてゐるか云ふ點にあります。言換へれば佛の大悲はいかなる人々も悪むところなく、いかなる場合にも親のやうな心を以つて、其の人の罪過をとがめず、其の人を眞實の人たらしめやうと働いて行くところにあります。」

三、本願と念佛

○「すると佛の本願とは何でせうか。」

□「精神的に云へば佛の根本の願いを云ふのであつて、自ら佛となつた佛の願はたゞもう一切の衆生を助けてやりたい、救つてやりたいと云ふ外に望みがないのであつて、其の一切衆生を救つてやりたいと云ふのが佛の根本の願いでありませう。乍然同じ佛の大悲でも自分の力で佛となり得る多くの人よりも、自分で努力しても佛になることのできない人、若しくは自ら佛となりたいと云ふやうな向上の心もなくして、常に墮落に墮落を重ねて居るやうな、して見やうのないやうな人々をこそ一層早く助けてやりたいと云ふのが佛の大悲であると云ふのであります。それは普通の人ならば自ら修養し、向上してやがては佛となることもできるから、そのまゝに捨て、置いてよいけれど、かうした愚痴、罪惡の人々はそのまゝにして置いては益々闇黒の生活に陥入つて行くからです。だから佛の大悲は普通の人よりも尊ろかうした愚痴、罪惡の人々をこそ一層強く離れることができないと云ふのであります。此の心が具体的に言葉となつて現はれたのが即ち大無量壽經に於ける四十八の本願であります。」

○「四十八願とは一体どんな意味のものでせうか。」

□「それは一々本文について御覽を頂くのが一番よいのですが、今略して之を云へば阿彌陀佛と云ふ佛の本願を言葉を以つて簡條的に示されたものであります。そして其の數が四十八あるので四十八願と云ふのです。」

○「その四十八願と云ふのは皆各々異なるものでせうか。」

□「支那の善導大師の見方によれば四十八願各々が皆凡夫往生の爲めだとあります。其の本願の一々の内容から云へば各々異なる點もありませんが、又一面には願々相依つて如來の大悲を完成してゐる點もありません。」

○「其の本願の内容を今少しく具体的にまとめてお話ができないものでせうか。」

□「私の考へでは、それを宗教の目的と本尊と方法との三つに分けて見ることができると思つてゐます。目的とは淨土のことで、本尊とは阿彌陀様、方法とは念佛のことです。そして、其の淨土と云ふのが如來の淨土であつて、又一面から云へば佛の境地、即ち佛の悟りの世界であります。而もいかなる罪ふかき人も愚かな人も往くことのできる佛の大慈悲のこもつた淨土として一切の衆生の往くことのできる世界であります。之を淨土教では阿彌陀佛の淨土とも、又無量壽無量光の佛國とも申して居ります。阿彌陀佛とは即ち救いの主、私共の大ミオヤ、願王の如來、宗教の本尊を云ふのです。方法と云ふのは即ち念佛、南無阿彌陀佛と稱ふことです。南無と云ふのは歸命のことで、如來の大悲に合掌することです。どうぞ佛よと如來におすがりすることが南無阿彌陀佛です。だから口に南無阿彌陀佛と稱ふことは心ではどうぞ佛よと如來におすがりすることであると淨土宗では教へて居ります。其の心は如來の大悲に私共の心が歸する姿で、自分の生活にあきたらぬ私共は本心が如來の大悲を聞かせられて、それに歸るの姿であります。」

○「どうぞやらおかげで幾分か判るやうになりました。まだ色々とお尋ねしたいことも多くありますが」

またお願いいたします。」

□「どうぞ、いつなりとも御出で下さい。お互に真剣に道を求むることならば私も共におつき合した
いと思ひます。」

(一九三二、四、一)

宗教改革者 法然上人 土屋 觀道

(一) 上人の社會的置位

□時代が人を造るか人が時代を造るかは暫く別として、法然上人が時代變革の時代に於て、淨土宗祖として今日の置位にゐられることは等しく皆の知るところであります。

□乍然法然上人の時代と其の宗教の立場から之を見ますれば實に上人の如きは單なる一宗の祖師にあらずして、正しく當時に於ける一宗革命の祖師として之を見るべきであります。其の所以は單なる一宗一派の開宗の祖師と云ふよりも、當時に於ける上人の置位は聖道門に對する一切の宗教を否定して、之に對する淨土門の建立の立場にあらせられるからであります。

□この事は私が云ふまでもなく、少しく日本佛教史を繙くもの、等しく承認するところでありますが、多くの人はそれを知らないのであります。

はそれを知らないのであります。
□乍然それにもかゝらず上人の社會的置位は全く從來の聖道門を否定して淨土門の建立にあるのであつて、社會的には全く宗教革命の中心をさへ爲すものであります。従つて其の後の淨土教は眞宗にせよ、西山にせよ、時宗にせよ、一として上人を其の祖師の中に仰がぬものとしてはないのであります。

(二) 當時の宗教

□然ば當時の宗教はどんなものであつたかと申しますればそれは主として天台眞言の二宗全盛の時代であつたのであります。否、それどころか二宗全盛の時代と云ふよりも二宗繁華の時代とも云つてよいのであります。

□それは平安の初め傳教、弘法の二人によつて、天台眞言の二宗が開かれまして、一時はよい意味に於ての全盛

の時代も現はれ、社會もその爲めに非常に救はれる点もありましたが、其の後多くは祈禱佛教となり終つて、その爲めに生ずる餘弊のみが多くなつたのであります。

□之は主として佛教の墮落を意味するもので、必ずしも天台眞言の兩宗そのものが悪いと云ふのではありませんが、當時の佛教は全く民衆の生活から遠ざかつた感がありました。

□それは時代の變遷にもよることでありませうが、從來の天台眞言は主として貴族佛教であり、學問佛教であり、御祈禱佛教であつて、多くの民衆はそれによつて生活することができなかつたからであります。

□尙當時の佛教が民衆の生活に一致しなかつたところは當時の佛教は主として天台眞言の二宗であります。二者共に學問を誇り貴族を装ふて民衆に近づかず、中には兵僧を構えて佛物を私し、暴力を奮ふて民衆を苦しめたのであります。

(三) 時代と生活

□加之、時代の變化は從來の思想や信仰では全く生きて行けなくなつて來たのであります。之は主として社會組織の變化によるものであります。すべての社會制度

が變化して來るに従つて、民衆の生活も自づとそれに應ずべき社會生活とならねばならぬからであります。

□然に從來の宗教は其の思想信仰に於て、主として從來の社會組織に一致すべく説かれて來た爲めに、其の結果は自づと新しき時代の生活と一致することができぬのであります。

□従つて、時代の要求は正しく其の時代に應じて、眞に民衆の活くべき本當の道を求めて止まなかつたのであります。而もそれに應じて現はれたのが所謂法然上人の淨土教であつたのであります。

□乍然上人の時代は平安の末朝、鎌倉の初め、所謂藤原氏衰亡の時代から源平の盛衰の時代に當るのでありますから、社會民衆の思想も生活も未だ充分には確立しない時であります。

□従つて民衆の思想信仰も未だ確定しない時代でありまして、上人の時代が最も甚しい時代であります。

□たゞ乍然當時の大勢は從來の公家政治から封建政治への一大轉廻であるだけに、其の思想と生活の轉廻に於ても此の傾向の多かつたことは云ふまでもありません。従つて、上人の宗教を中心として其の後の宗教が主として封建時代の民衆の生活に適すべく色つけられて來たことも尙いなむことのできない事實であります。

□乍然、その結果は上人の宗教が従來の貴族佛教や學問佛教から轉じて、平民の佛教、無學の宗教として民衆化せられて來たことは見逃がすことのできない點でありませう。

□それと同時に、従來の祈禱佛教、現世佛教、自力佛教が信仰佛教、未來佛教、他力佛教となつたことも否むことのできない事實であります。

(四) 上人の宗教と現代生活

□乍然それは法然上人が時代の人として、時代の影響を受けられた爲めであつて、又上人としてはそれでこそ當時の民衆を眞に救ふこともできたのでありませう。そしてまたそこが上人の宗教家として偉大なる点でもありますが、それだからと云つて今日の民衆がそれ丈で今日も尙救はれるかは問題であります。

□何となれば今日の時代は已に封建の時代が過ぎて民権が信仰主義、未來主義、他力教となつたことも否むことのできない事實であります。

(五) 上人の宗教

□乍然それだからと云つて上人の宗教が單に封建時代の宗教とのみ見ることは大なる誤りであります。何なれば

上人の宗教は以上の外に更に來るべき時代の要求にも應ずべき充分の内容を持つてゐるからであります。

□此の事は特に私共の深き注意を要するところであつて、上人の宗教がともすれば單なる封建時代の既成宗教として見られ、現代を救ふの宗教としては反つて排斥せられる點もあるからであります。

□それは上人が時代の人であり、又當時の時代を救ふべく時代に適して説かれたる點もあるが爲めに、時代を異にした今日からは一見さうした点もないとは云はれぬのでありますが、更に上人の宗教はそれらを越えたる永遠の生命を興ふるものもあるからであります。

□それは人類の内心の要求でありまして、淨土教の本質が聖道門に比して民衆本位の生活に即してゐる點であります。謂換へれば單なる二三の貴族の専有や、一二の學問的個人佛教や、社會を無視する自力佛教の弊害を離れて、民衆本位の平民主義、共生主義、凡夫主義の生活は寧ろ封建時代より今日に於て一層の民衆の要求に應ずるものでないかと思ふのであります。

□従つて此の意味から云へば上人の宗教は已に封建時代の民衆の要求たる宗教であつたばかりでなく、更に今後の民衆の要求たる宗教としても最も私共の歓迎すべきものであると云はねばなりません。

□たゞ茲に注意すべきはいかに上人と雖もやはり時代の産物として時代の影響も受けられ、又時代を救ふべく時代の思想信仰の一面も在らせられたと云ふ點に於て、私共はそれをそれとして公平に見ると共に更にそれ以上の

上人の立場を充分に知ると云ふことであります。□此の意味に於て上人の宗教は更に現代を救ふべく現代に適したる方面として、新に説かるべき世界が甚だ多いかと思ふのであります。(一九三二、三、三一)

行基寺三昧會に際して

土屋觀道

□行基寺の三昧會と云へば毎年四月に其の會を開くのが例となつて居りますが、彼の地で此の催をいたすやうになつてから、もうかれこれ十ヶ年にもなりませうか、今では信州の唐澤と併せて私には永久に忘れ難い一つの名残りとなりました。乍然之もひとへに主催者行基寺上人御一家の御厚意と道友各位の御信仰の力であります。今年四月十四日から云ふことになつて居りますが、丁度春も花咲く櫻の頃と満山花の盛りであります。日頃の疲れを休め、如來の慈光に活動の源泉を得るには此の上もない好機會です。

□それについて私は特に道友の方々に御勤めしたいことがあります。人生の一生は夢幻のやうなものだから、餘程注意して此の世を渡らないと、一生何事もできずして過ぎてしまうと云ふことです。さう云へばだから自分が

毎日働いて一日も無駄に此の日を過ぎぬのだと云ふ人はあるかも知れませんが、乍然それならば果して私共はそれだけの仕事を此の世に爲したかと顧みてお覽なさい。毎日々々急々として働いても其のあとから之を眺むれば其の何を爲したかさへぼろつとして判らぬのであります。□世には成功したとか失敗したとかと云つて、泣いたり笑つたりしてゐる人もあります。が乍然之を大自然の上に眺むるときそれが何の成功であり、失敗でありませう。要するにそれらは世俗の戯れにすぎないやうです。急がしいと云つてもたゞ早々として安らぐところがない、暇だと云へば冬ごもりの蛙のやうな何にもできない暇のみが此の世の普通の人でせう。□殊に近頃の人達は金さい出来れば成功だと思ひ、金さへ無くなれば失敗だと思ふ。丸で人間の尊さが金で左右

せられて居ります。之では人格は○であります。

□金が尊いか、自分が尊いか。金が尊いから金の爲めに自分の命をそれにささぐるのなら、その人の命は正しく金の爲めの奴隷でありませう。之は金持ちの人が考へねばならぬことですが、金持ちでない人達も考へて悪いことではありませぬ。何せかなれば今時の人達は殆どすべてが金銭の爲めに左右せられて、眞實の自己を知ることができないからであります。

□斯く云へば、それでは金なくて生きて行けるか。反對する人がありませう。乍然それはまた別問題でありませう。いかに金が入らぬからと云つても今日の社會に一厘の金もいらぬと云ふ馬鹿もありますまい。乍然金が入るからと云つても金は命に代るべきものではないのです。

□とに角、人生は金が目的ではない、金以上に人の尊さがあるのであります。春の日のうららかな時、大自然の風光に此の身心を打ちひろげて、如來の大慈光にひたり本心の自己を心から味ふ云ふことは人云ふ人の中に之ほご大きな人生は亦とありません。

□之から社會に働く人も、此の人生の眞意義を悟り、眞實の自己を活かさうとするには、此の三昧會より外に本當の道はありません。

□近頃世間が不景氣と云ふので、一週間も山にこもるの

は色々の經費も入るのでとてもやり切れないと云ふ人もあるかも知れません。乍然そんな位の人だから、反つて日常の生活もできぬのだとも云はれないこともありませぬ。普だんから遊んでゐる人が此の上尙一週間も金を費つて山の上に遊ぶと云ふのならそれこそ、こんな不景氣にたまつたものではありませぬ。乍然日頃から働いて急かしいやうな人だから時には山にもこもり、念佛も申し又大自然にもなれて如來の慈光にも入りひたると云ふところに本當の人生もあり、安きもあり、又活動の源泉もあるのであります。

□遠い處を費用を使つてまで來たと云ふところに本當の念佛も味はへるのであつて、その經驗のない人には反つて本當の念佛は判らぬかも知れません。念佛の理想から云へば行住坐臥念佛即生活、生活即念佛です。乍然それは理想の究極しかありません。急かしい生活の中から思い切つて遠い處までやつて來て念佛三昧に加はると云ふところに更に一層の生きた念佛の世界を發見するのであります。

□さうかつまらぬ事柄にこだわらず、思い切つて道友の御集りを心から念願する次第であります。殊に今日のやうな不景氣の時に一層その必要を感じるのであります。

(於柏崎、四、二)

寺院の活路に就て (宗門の反省)

土 屋 觀 道

(一) 宗門の自覺

□今日の寺院が今のなりで早晚行き詰ると云ふことは必ずしも識者を待つまでもないことである。否、現に今日の寺院は各方面に於て行き詰つて居ると云ふ人もあるが或はさうだと云ふ方が本當かも知れない。

□或は信仰の方面に、或は經濟の方面に、其の他思想や生活や全く現代に入られない立場にあるのが本當ではないか。而も之をさうしたらよいか、それが今日の問題である。

□それには寺院が宗教本來の面目に歸つて、信仰に生きることである。信仰なき寺院が繁榮する理由がないからである。否それどころか信仰なき寺院の存在は社會的に言つても全く其の存在の意義を爲さぬからである。

□乍然信仰の復活は今日の場合今の寺院ではできないかも知れぬ。それはあらゆる方面に於て、寺院建立の當時と社會の事情があまりに相違してゐるからである。乍然それがたとひいかに困難にしても、寺院の成立上それより外に道がないとしたら、寺院の住職たるものは今さら

そんなことも言つて居れない事かも知れぬ。

□此の意味に於て、今日の寺院の復活は到底、一朝一夕にして成し遂げ得らるべきものではない。乍然たとひ一寺院でも早くそれに目醒むればそれだけの寺院は復活する。従つて、寺院の復活は必ずしも宗門全体が一時に目醒めねば、さうにもならぬと云ふものではないかも知れぬ。

□乍然、それにしても今日の寺院が本當に目醒める云ふことは大へんなことである。或る宗門の博士が「古來我が淨土宗には安心と云ふものがない」と云はれたのを聞いたことがあるが、其のいかなる意味で之を云はれたかは暫く別として、今日の寺院に本當の信仰があるかは大いなる疑問であらう。

□私が斯う云ふことを云ふのは今日の寺院を侮辱する爲めでないことはもとよりである。乍然之では宗門の前途も全く淋しいことではないが、今少しく眞實の信仰を寺院の中に復活させると云ふことは非常に大切なことではないか。

□此の意味に於て今日の寺院は今一度宗祖の時代に歸り

宗祖の信仰に生きねばならぬ。それが寺院として一番手近な早路ではないか。信仰なき寺院は己に其のまゝが死でゐる姿である。

(二) 宗乗の反省

□第二には宗乗の反省である。之はあながちに宗乗が悪いと云ふのではない。乍然少くとも今日に宗乗が多くの人を生かしてゐないと云ふことだけは事實であらう。人を生かさぬ宗乗が果して何の宗乗であらうか。

□それも正大あたりの教授として古典宗乗の研究ならばあながち悪いと言ふのではない。乍然若しも今日の寺院が社會的存在として其の宗教の本分を果たさうと云ふのなら、今日のやうな宗乗の研究ではいけない。

□それは時代を救ふべく、常に時代と關係して、現代の思潮と生活を指導すべきものでなくてはならない。而して今日の所謂宗學者が果してこれだけの關心を此の事に持つてゐるであらうか。私は概歎に堪えないものがある。

□今日の宗學は宗乗を活かしてゐない。少くとも現代人を救ふべく之を研究してゐるとは思へないではないか。之は宗門全体としても共に反省すべき事柄である。

□自分にも信ぜぬものを宗乗だからと云つて之を人に勧

むることは無理ではないか、まして自らにも信ぜられないものを多くの人々に強ゆると云ふことは更に一層の非道である。

□今日の寺院は自らその宗門に屬するが故に、止むなくそれに盲従はするものゝ、今日の社會民衆までがそれに従ふものと思つたら大變な間違いであらう。

□かく云へば頭の古い人達は云ふかも知れぬ、「宗門の宗乗は二祖三代によつて定つてゐる、それを今更さうすると云ふのか、それが信ぜられぬなら宜しく自ら宗門を去るべし」と云ふかも知れぬ。

□乍然それはあまりに氣早ではないか。そしてまたそれは必ずしも本當に一宗を愛するの態度でもない。何となれば今日の青年は必ずしも愛宗の念がないのではない、時代の相違や生活の違いが昔のまゝの説明では其の宗乗が信ぜられぬと云ふのである。

□そしてまた今日の宗乗が信ぜられぬと云ふことは必ずしも今日の宗乗が悪いのではないが、其の宗乗の見方、説き方が現代人に飲み込めないと云ふのかも知れない限り、之を説く人の罪がないとは言へない。

□之は宗乗を研究し、宗乗を教ゆるものゝ大いに反省すべきところであつて、徒に大言壯語して未信の人を攻むべきでなく、自ら反省すべきである。

□加之、今日の新しき佛教の研究は必ずしも昔のまゝの宗乗で満足しうるものでないではないか、而してそこには可りに従來の宗乗内容にも深き反省と改訂とを要するものがないではなからうか。

□一例を擧れば原始佛教の研究と淨土教義の研究の如き、或は佛典成立に對する近代の研究と宗乗の經典成立の見方の如き必ずしも一致するものばかりではないではないか。

□而もそれを知らない間はそれでもよい。乍然己にさう云ふ不一致があると云ふことを知つた限り、之が解決をせずして昔のまゝに之を信ぜよと言ふことは無理ではないか。之また等しく宗門の反省を要することである。

□然にそれにもかゝらず、従來の宗乗學者は之を知つてか知らないでか、寸毫もそれらに對する反省がないではないか、之では全くやり切れぬ次第である。

□而も宗祖に生きると云ふことは必ずしも宗祖の法語に盲従すると云ふことではない。又宗乗を學ぶと云ふことは必ずしも従來の宗乗なるものを丸のみにすると云ふことでもない。

□要は自らの信仰に生き、自らの生活に本當に役立つと云ふことではないか。それに宗祖の信仰に自らが生きるると云ふことが第一である。信仰に生きない宗乗が一体何

の意義をなすのであらう。

(三) 時代と生活の相違

□それにしても、寺院の考ふべきことは時代と生活の相違である。而して眞實の信仰は時代に即して時代を救ふのが本當ではないか。たといそれが幾億の人類をその昔救つたとて、それが今日を救はぬ限り、それは今日の宗教ではない。

□従て、今日の寺院が今日に生きるには少くともそれが今日の社會に關係し、今日の思想と生活とに關係しなくてはならないであらう。

□然に今日の社會と昔の社會とは大いなる開きがある。而もその開きは必ずしも單なる時間の開きではない。少くとも其の生活と思想との立場に於て可なりに大なる相違があるかと思ふ。

□而もかうした場合、昔の時代に適すべく解釋せられた宗乗で今日の變つた社會を指導して行けるであらうか。之は少くとも有識の反省すべきところである。

□然に今日の宗乗は果していかに生くべきか、それは云ふまでもなく現代を生かすべく、現代に觸れて、現代の思想と生活を指導すべきである。而てそれがまた釋尊の教へにも適し、宗祖の心にも叶ふ所以ではないか。

□ 少くも時代に觸れない宗乘は現代の宗乘としては己に生命なきものである。生命なき宗乘は少くも今日の宗教ではない。而てそれが今日の宗教でない限り、現代人はそんな宗教や寺院は此の世に存在を許さぬではないか。此の点大に宗門の反省を要するところである。

(四) 寺院の解放

□ 次に第四には寺院の解放である。それは寺院本来の面目としても當然すべきことではあるが、今日の寺院の本来の活路は今日の寺院をして眞に社會に役立たしむる外にその道はない。而てそれは寺院の解放ではないか。

□ 而も寺院の解放とは必ずしも寺院を社會に放棄せよと云ふ意味ではない。たゞたゞ之を社會民衆の爲めに提供して寺院本来の面目に歸れと云ふに過ぎない。

□ 寺院は民衆の道場である、少くとも道を求むる道友でなくてはならない。然に此の意味からすれば今日の寺院はあまりに宗團の私有化ではないか。之では寺院が發展しないのも當然であらう。

□ 而も今日の寺院からすればそれも亦止むなき事情かも知れない。乍然今日の寺院が寺院として此の世に生くるにはやつぱり寺院本来の面目に立ち歸り、信仰を中心とする民衆への解放の外に本當の寺院の生くる道はないで

はないか。

□ 而て、此のことはやがて之を社會の立場から見ても、眞に存在の意義を爲すものであり、また寺院そのものから見ても、そこに存在の價値を爲すものである。若もさうでないならば今日の寺院はやがて民衆の爲めにのろいとなり、社會の上からは没收せらるべきものかも知れぬ。(一九三二、二、四)



子供の母より

美和子

○ お七夜に(千枝子と名つけて)

○ 白かれも黄かれも王も歌へにし
昔の人の心にぞ通ふ

○ 御光に千枝も八千枝も榮え行く

君が幸こそめでたかりけれ

○ 限りなき慈悲の光に照されて
生れて君は千枝萬光

吾朋便り

□ 越後柏崎より 土屋觀道

一月に關西方面へ出てから、其後二ヶ月、全く在京の人として暮した私は、今度再び旅の生活に出立しました。昨夜東京を立つて、今朝當地についたのですが此の地をすましてから和歌山、神戸、大阪、行基寺を経て名古屋、焼津、静岡を廻つて本月の末には歸京する豫定であります。五月は亦佐屋の黒宮様の別時會もある事とて、こゝ暫くは傳道の方に急がしいこと、思います。

□ 尙三月は五日から、越後の方へ五日間三味會、引つゝ和歌山、大阪、神戸、尼ヶ崎、青屋、津、四日市、名古屋、御影、岐阜、焼津と各地参上の豫定でありましたところ、思ひかけなき感冒の爲めに全部取り止めになりました。已に約東濟みの處もあり、柏崎の如きは已に廣告済みとのころを取り止めたこと云ふことは私としてはたい病氣ではあつたとしても、全く申わけもないことでありました。此の点各地道友の御容恕を願ふ次

第でありませう。

□ 私としては近來にない高熱で二十年來の初病でありました。床にあること十四五日今日で幸に全快いたしましたから乍他事御安神を願います。まだ幾分の病後の疲れもあります。此の分ならば大丈夫かと思ひます。私の床につく前に妻がお産して二階に寝み、十日もしてから、姉の子が感冒にかかり、引つゝ、女中が二人倒れ、小供が三人か、り一家悉くやられたあゝに私が最後の殿戰をやつたやうなわけでした。然し今では皆無事全く春光の中に生かされて居ります。之また御放念のほどを御願申します。

□ 尙序で乍ら、三月は各地の來客が多くて全く東京では道友の集りをしたやうな感じがありました。越後の原吉郎氏が代議士として議會にお出でのことには申すまでもないことですが、四日には令息哲郎氏が御見えになり、又岐阜の古賀清一郎氏、大阪の豊田様、新銅様、大垣の馬淵様、四日市の服部様、佐屋の黒宮(平八)様、其の他原様の奥様などの御上京に接し、一々御來訪を受けて喜びの極みでし

た。殊に御多用の中から上京したと云ふのでわさ／＼御訪れを受けて語り合ふて頂いたことを心から深謝いたします。

□ 實は今度の病氣で今更のやうに人生の果かなさを痛感させられて、色々感ずるところがありました。其の中でも、人と云ふものは強いやうで弱いものだなあと思つたことです。それにつけても人はいつ死ぬかも知れぬものだ、いつまでも達者さばかり思ふのは非常な誤りである、多くの人々が此の世を去るのまかうしていつの間にか逝くのではないか。こんなことを非常に痛感させられまして、一刻も早く自分の成すべき仕事に全力を注がねばならぬと一層そのことを覺悟するやうになりました。

□ お互にいつ死ぬか知れぬ位では相濟まぬことですが、願くは俱に本當の自分を見つめて自ら爲すべきことに精進いたしたいものであります。(三三、四二)

大阪 豊田省三様より

過日は久しぶりで緩々お目にかゝる事が出来まして誠に嬉れしく存じます。各地の御傳道も好成績の様に承りまして、御同慶の至であります。當地の方も今年ほうんさ力を入れて道友の發奮を促したいと存じます。心計りはやつて力が伴はないのを耻かしく存じます。どうか益々御援助をお願い申し上げます。来る三月初旬には千息に慶應大學理科の試験を受けさせたいと存じまして、上京する考へて

あります。その節には又お尋ね申し上げます。皆さまへよろしく。

大坂 神谷學周様より

其後御無沙汰申しております。お變りもありませんか。さて本日の和歌山の方ですが神谷善之進氏かごなたか出張せられるようにお願いして頂きたいとの先方の依頼ですがどうぞその所よろしく御取り願ひ至急和歌山へ御通知を御願ひ申し上げます。時節がら御一同様の御健康を御祈りいたします。

行基寺別時三昧會案内

時 四月十四日午前五時開白 四月二十日閉會

所 岐阜縣海津郡城山村 行基寺

(養老線美濃山崎驛下車約五丁)

師 土屋 觀 道 師

○土屋上人は十三日夕方御着です。

○どうぞ皆様御誘ひ合せ御隨喜下さい。

主催 行 基 寺

本誌定價
一部 金 十 錢 郵稅共
半年 金 六 十 錢 全
一ヶ年 金 一 圓 全

注 文 の 意
●講讀希望者は代金を添へて御申込下さい
●誌代は總て前金御拂込の事
●送金は振替によるのが便利
です

昭和六年四月十日印刷納本
昭和六年四月十二日發 行

東京市芝區芝公 十四號地九番

發行兼 編輯人 土 屋 觀 道

名古屋市西區隅田町二一番地
印刷人 百々 治 之 助

名古屋市中區鍋屋町二丁目
印刷所 山田活版印刷所
電話東(4)〇六五・七五五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞 生 社

振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日)

昭和六年四月十日印刷納本

(第三種郵便物認可)

昭和六年四月十二日發行

第十卷第四號